

父との五十キロ

吉元 美羽

「治してあげることでも大事なことだけど、最期を見送るのも大事なんだよ。」
そう言っ、父は今日も帰って行った。

五十キロメートル。これは、わたしと父のきよりだ。病院で働く父は、きり島市に一人で住んでいる。毎日一キロメートルを歩いて通学するわたしにとっては、父とのきよりは、二十五日分に当たる。同じ鹿児島県でもわたしにはなかなか会いに行けないきよりだ。

そんな父との一番の楽しみは、二人で行くえい画館だ。ポップコーンやジュースを買って二人で笑いながらえい画を見る。六人家族のわたしにとつて、父と二人きりになれるゆい一の時間なのだ。もちろん、兄たちもわたしに負けなくらい父のことが好きだ。ふだんは自分の部屋にもっているが、父が家に帰ってきて、ちゆう車場に車を止めていると、ダダダツと階段をおりてくる。そして、リビングには家族みんなが集うのだ。

父はわたしたちが小さかったころ、めがねをかけたトトロのようだった。父の大きなおなかの上で、トトロのめいちゃんのよう顔をうずめるのが大好きだった。しかし、今は仕事が忙しくなり、やせていった。すっかりつかれていてつらそうだ。父が、「やっ」と今昼ご飯を食べられたよ。」

と言うときには、もうすっかり夜なのだ。ドクターへリを特集しているテレビを見ていたとき、父はこんなことも言っていた。

「パパはり島に行くとき、へりで一時間乗っているよ。天気の良いときは、このまま落ちたら見つけてもらえないかもな。お前たちにももう会えないのかなと思うときがある。」

それを聞いたとき、父の仕事は思っていた以上にもっともっと大変なんだと思った。

家での父は、ひたすらグーグーねている。でも、電話が鳴ると飛び起きる。テレビの音は急いで消され、兄たちに「シーツ」と合図を送る。わたしはこのとき父はもう帰ってしまったのかとドキドキする。父はいつだって仕事をしているのだ。

父とわたしのきよりは五十キロ。もちろんさびしいし、いつも一緒にいたい。しかし、ドクターへリに乗って命を救いにいく父の姿は、かん者さんにとってヒーローにちがいない。いつも大変な仕事をこなしながらも、わたしたち家族のためにがんばっている父は、わたしたちのヒーローでもあるのだ。

父の休日も終わりが近づき、夜おそくにきり島へ帰るときがきた。いつもならとつづくに眠っている時間だが、わたしは、母に内しよで、こっそりベランダから見送りをして

いる。

「気をつけてねパパ。お仕事がんばってね。次帰ってくるのを楽しみにしてるね。」

家族のため、かん者さんのためにがんばっている父に「ありがとう」をこめて、おもいっきり手をふっている。

評価のポイント

50キロメートルと距離を出すことで、心は近いことを引き立たせている。